



国境 (境橋)

東海道遠江・駿河：13新居一白須賀



白須賀宿 新居宿より1里24町
本陣1、脇本陣1、問屋1、旅籠27町並み14町19間
地名の由来、砂州の上にできた集落。宿はもと、汐見坂を下った元町(元白須賀といった)あった。この辺りは海辺で度重なる水害に遭っていた。宝永4年(1707)の津波被害により現在の汐見坂台地に移転。



白須賀本陣跡



白須賀宿曲尺手

猿ヶ馬場の由来

その昔秀吉が小田原征伐の途次この茶店でひと休み。お婆さんが柏の葉に包んだ餅を出す。お婆さんが猿に似ていたので秀吉は自分のことはさておき「さるがばば」と言ったという。餅はこの名物柏餅になる。

潮見坂公園

広重の版画、「白須賀」はこの風景。江戸へ向う旅人はここで初めて海がみえたという。信長が信玄討伐の帰途。家康がここに茶亭を設け接待した。



6代將軍足利義教が富士遊覧の折り、風景を愛し、紅葉を賞した所。今、荒廃。



元町から移って水害に遭わなくなったが冬場、火災が度々発生したので所々に「火よけ地：2間X4間」を設け火に強い常緑樹、榎がうえられた。

火防の樹、榎
なつめみかまる
夏目 蓑麿跡
加納諸平生誕の碑
脇本陣高札跡
本陣跡木村庄左衛門宅跡
曲尺手
白須賀
十王堂
明治天皇御遺蹟地記念碑
おんやど白須賀
汐見坂
潮見公園
蔵法寺
元町
一里塚、高札場跡
新町
大倉の立場碑
火鎮神社
明治天皇野立所跡
浄化センター
大倉戸
養護学校
紅葉寺
浜名
松山

夏目・加納親子は造り酒屋で名主役を勤めた。蓑麿は通称嘉右衛門といい、名主、家業のかたわら国学を学び、本居宣長門下に入る。萩園と号し、「吉野の若葉」、「萩園歌集」を残す。諸平は蓑麿の長男で、若くして紀州本居大平に奇遇し国学を学び、安政3年(1856)、紀州候に請われて国学所総裁になる。

一休み

十辺舎一九(本名 重田貞一)
明和2年(1765)駿府府中、父は町同心の家に生まれた。若い頃江戸で小田切土佐守直平に仕える。24歳の時大阪の木材商に入り婿。離縁され30歳で江戸に戻る。大阪にいたとき近松与一の名で浄瑠璃を何本か書く。江戸で印刷業篤屋重三郎宅に居候。ほどなく「黄表紙」(大人向け漫画)を出版。やがて「膝栗毛」を篤屋に見せるが断られる。小さな版元村田屋から出版。20年も続くロングセラー。原稿料生活作家の1号。一九は酒好きで天保2年(1831)酒による中風で没。辞世句
「この世をばどりやお暇と線香の煙とともにはい左様なら」

蔵法寺

本尊潮見観音
今川義元の祖父義忠の墓がある。潮見坂の崖で戦死する。本尊は承応3年(1654)近くの海岸に流れ着いた一尺九寸の観世音。宝永4年(1707)富士山大爆発、大津波があった。この時岡山城主池田綱政が江戸より帰途ここに止宿。観世音の霊夢により難を逃れたという。



[弥次・喜多]白須賀宿手前で二川から来た簀に乗り換える(宿は汐見坂の下が舞台)

乗った駕籠の座布団の下の銭を失敬する白須賀の茶屋女をみて
「出女の顔くろきも名にめでし七なんかくす白すかの宿」
汐見坂上り、絶景を見て一句。鹿を見てまた
駕籠かきには分かるまいと、猿丸太夫の歌を詠う。
「おく山に紅葉踏み分けなく鹿の、声きくときぞ秋はかなしき」

駕籠かきにほめられいい気分になり「猿ヶ馬場」で酒を奢る。駕籠かきは猿丸太夫さまが奢ってくださいと飲み始める。喜多さん恥をかく。先に失敬した銭で支払う。駕籠かきが座布団の下の銭がないと騒ぎ出し、失敬がばれる。